

神奈川新聞 報道部次長 石橋 学

皮肉ではあるが、安倍晋三首相の言っていることは正しい。

TBSのニュース番組に出演した際の発言が報道への圧力ではないかと指摘され、「番組の人たちはそれくらいで萎縮してしまう人たちか。極めて情けない」と述べた。昨年3月の国会での答弁だ。

圧力をかけている張本人が居直っているという倒錯が、そこにはある。だが、この物言いこそは、権力を監視するジャーナリズムが有効な歯止めになっていない証左。テレビ局の停波に言及する高市早苗総務相の発言まで飛び出し、「極めて情けない」のである。

弊紙の「時代の正体」シリーズについて、記事が偏っているという批判に応える論考を私が書いたのは昨年10月のことだ。

◆偏ってますが、何か？

論旨は以下のようなものだった。一つの論は立場や考えが違えば偏っ



SEALDs (シールズ) による国会前の抗議行動の様子 (著者撮影)

て映るのは当然で、政権の悪口ばかり書くなどというのなら、ジャーナリズムの役割なのだからやめるわけにはいかない。そして、民主主義にとって大切なのは多様性であるとして、こうつぶった。

「だから空気など読まない。忖度しない。おもねらない。孤立を恐れず、むしろ誇る。偏っているという批判に『ええ、偏っていますが、何か』と答える。そして、私が偏っていることが結果的に、あなたが誰かを偏っている」と批判する権利を守ることになるんですよ、と言いつける。

フランスの哲学者ヴォルテールの至言、「私はあなたの意見には反対だが、あなたがそれを主張する権利は命懸けで守る」が念頭にあったのは確かだが、ここで私が伝えなかったのは、表現の自由の本質とは何かといった高尚なものではなかった。

それ以前の問題として、批判を恐れ、口をつぐむようなことがあってはならないという自戒だった。つまり内向け。大勢に流されず、波紋を広げてこそこのジャーナリズムであり、臆する気持ちがあるのなら、このように反論すればよいという模範解答を示すためのものといつてよかつた。萎縮の空気はそれほどまでに広がっている。

◆「中立」こそ自殺行為

それは公正・公平とは何かをめぐる議論によく表れている。

件の高市発言は放送法4条にある「政治的に公平であること」を根拠にしている。だが、放送法の精神はかつての大本営発表の反省に立ち、報道機関への政治介入を防ぐことにある。中立性が求められる主客をひっくり返す錯誤をこそ批判しなければならぬのに、さしたる反論もせず、高市発言にも一理あるかのように扱う現状がある。それはやがて自分たちの首を絞めることになるのに、である。

① ジャーナリズムってなんだ？

安倍政権を斬る!

中立という隠れ蓑に逃げ込み、何が公正・公平であるのか判断を回避する「中立病」こそはジャーナリズムの自殺にほかならず、偏っていてよい、そして多様なさまを自ら体現していくべきだと私が考えるのは、ヘイトスピーチの取材を続けていることと無縁ではない。

報道機関は公正・公平であるべきだというとき、その公正・公平はすでに存在しているものでないのは、在日コリアンが差別を受けていることから分かる。そうであるなら、あるべき公正・公平を実現することが先決になる。つまり不公平・不正をただすことが求められているということになる。そしてそれは弱者に肩入れし、偏って初めてかなうもの。

ヘイトスピーチ規制には表現の自由との兼ね合いを理由に慎重論がジャーナリズム界にも根強い。それは日本人の表現の自由を守るため、死ぬ、殺せと言われることを甘受せよ、と在日コリアンに強いているに等しい。その自らの不正に気付けないのであれば、それこそ権力と対峙する以前の問題といわざるを得ない。

安倍政権のメディアへの圧力はいよいよ露骨である。安保法制をめぐって憲法の縛りを自ら振りほどいたように、権力の側が政治的公正・公平を求めるという暴走は繰り返されている。

2015年夏、国会前に響いた若者たちのコールを思い出す。主権者意識の芽生えであった「言いたいことを言え、俺たちが」との叫びは、我々にも向けられていたに違いなかった。自らの足で路上に出て、自らの声を上げた人たちは問っていた。ところで、あなたたちメディアの主体はどこにあるのですか、と。内なるジャーナリズムの危機に向き合わずして、安倍政権の暴走は止められない。

表には出てこないフクシマの健康被害 言いにくいことを言い続けたい

5年
あれから



木田 節子

福島県双葉郡富岡町に 20 年
間暮らしてきたが、福島第一
原発事故で自宅が警戒区域に
指定され避難生活に。被ばく
(原発)労働者の母。故郷を
失ったショックで一時は引き
籠りになるが、東海村村長の
「福島県の人々の現状を思う
と、この国には原発を持つ資
格はない」という言葉を聞いて
原発反対運動に加わり、発
言を続けている。

5年前のあの日から3月11日
は「3・11」と呼ばれる特別な
日になってしまいました。

毎年、その日が近づくと、テ
レビでは「あの日を忘れない」
「被災地はいま」などのタイト
ルで、地震発生から津波被害ま
での映像を繰り返し流します。
亡くなられた人への鎮魂と進ま
ない復興を取り上げて論じては
くれますが、健康問題について
は、誰もが気になりながら口には
出せないでいます。本質に触
れず、特に放射能との因果関係
に関しては、はじめから取り上
げようとしない消極的な報道姿
勢を感じてしまいます。

治療費負担の「条件」

福島県の子どもの甲状腺ガン
発症者は、2015年12月の
データでは166人となってい
ます。平時の子どもの発症率は
100万人に1人と言われている
ことに照らし合わせると、福
島の子どもは1億6000万人
以上いなければ計算が合いま
せん。

福島県では、事故当時18歳以
下で、甲状腺検査の結果、治療
や経過観察が必要とされた人の
医療費を全額負担しています。

甲状腺の摘出手術を受ける
時、転移・再発については「口

外しない」という同意書を書か
されています。そのためか、ど
のような治療が行なわれている
のか分かりません。親たちが同
意書に応じてしまうのは、同意
しなければ治療費が自己負担に
なることや、子どもの将来への
影響を考えてしまうからでしょ
う。

『フライデー』(昨年9月25日
号)は、重篤な状況を自ら告白
した勇氣ある患者について報道
しました。当時中学3年生だっ
た女性が原発事故以降1年半で
甲状腺がんになり、手術したが
転移したというものです。

増える妊娠の異常

原発事故後に、死産や中絶な
どが増えたことについて取り上
げた月刊誌もあるのですが、記
事掲載の数カ月後に廃刊となっ
てしまいました。私の娘自身、
さらに娘の友人や職場の同僚
だった人など、周りを見渡した
だけで1年の間に8人も中絶し
ていたと分かりました。それで
放射能が関係しているのではと
考えるようになりました。

けれど、それを口にするこ
とは差別につながる、復興の妨げ
になるといふ今の福島空気の
中では、なかなか表には出てき
ません。

顔見知りの避難者が「多指
欠損の子どもが生まれている。
一番多いのは口蓋裂です」と教
えてくれたり、「福島で医者
をするからには余計なことは言
えない」と話してくれた医者も
います。しかし、公表されなけ
れば、原発事故との因果関係を証
明することはできません。

福島で起きていたことは「な
かったこと」にされ、原発を再
稼働させようとしている人たち
にとっては、さほど痛みを感じ
ることのない3・11報道が繰り返
される限り、「あの日」は忘
れられ、ただの記念日になって
しまいます。「福島は今」が、
どこかの町の未来にならないで
ほしい。原発災害が繰り返され
ないように願うばかりです。

フクシマから学んでほしい

私は首都圏や、原発の立地県
での再稼働反対集会やデモに参
加し、原発難民となった自身の
体験や報道されない福島につい
て発言してきました。

報道が尻込みする事実を伝え
ることで、福島で作られた電気
で暮らしてきた首都圏の人たち
に真実に気づいてほしいという
気持ちです。そして原発立地県
の住民に対しては、原発マネー
による繁栄にすぎないことは、い
つ割れるか分からない薄氷の上
で暮らすようなもの、フクシマ
から学んでほしいと思います。

現状は厳しく、思いはなか
なが届きませんが、人生の終わ
りに後悔を残さないために、言
いにくい場所で、言いにくい人
に、言いにくいことを言い続け
ることだけは諦めないでいた
いと思います。